

クルト・ケルステン 「マクシム・ゴーリキー：勝利の予言者」¹⁾

Kurt Kersten, « Maxim Gorki : Der Prophet des Sieges » (1936)

「私はもはや人生に耐えられなかった、多くの嘘と抑圧が私を取り囲んでいた」とゴーリキーは友人に告白し、若い頃自殺を試みた理由を説明した。悲惨な人を意味するゴーリキーを自称する前、彼は当時ペシコフという名で、オカ川が合流するヴォルガ川沿いの古い町、ニジニ・ノヴゴロド出身の貧しい大工の息子だった。若きペシコフの人生は悲惨で、同様のことに耐え忍んだ作家はほとんどいない。ドイツではフリードリヒ・ヘッベルが陰鬱な青年期を体験したが、いかに彼らの経歴が似ておらず、彼らのものの見方や目標を追求した作品が正反対であることか。ヘッベルには半世紀後のマクシム・ゴーリキーと同じように成長できていたかもしれない多くの条件が整っていた。ゲルハルト・ハウプトマンはゴーリキーよりわずかに年上で、ゴーリキーに似た人生カーブを描いていたかもしれない。しかし、その上へと導くカーブの初めで、脇道に逸れてしまった。おずおずと恥じ入りながらドイツ人の観察者〔ハウプトマン〕は、マクシム・ゴーリキーの道をたどる。ゴーリキーは世界で最初のプロレタリアート革命作家であり、その生の闘いと作家活動の発展はいつも民衆の自由のための闘いと結びつき、その申し分のない生は調和的統一に満ちていた。ゴーリキーの生の闘いは、若きペシコフが祖母からよく聞かされ、その思い出を忠実に記憶にとどめていた民衆史のような性格を帯びている。母とは疎遠になり、父を失い、貧しく、さげすまれて、その子は路地から路地へごみを集めては古道具屋に売っていた。学校では「浮浪者」と笑いものにされ、悪口で傷つけられた。子どもたちは彼が「肥だめ臭い」と言い張って、彼の隣に座ることを拒んだ。子どもたちは大人たちより粗野で残酷なのではなく、大人の口真似をする教育方法の成果なのである。子どもは、同年代から与えられる悪口雑言と辱めを忘れたことはまずまったくない。ゴーリキーは告白する、「私はこの非難にどんなに深く腹をたて、その後学校に行くのがいかに困難になったかを忘れていない」。その後、その若者は「よそ者の下へ行け」と送り出され、靴屋の使い走りとなり、ヴォルガ汽船で皿洗い

となり、臨時工、雀取りをし、子どもの面倒を見、聖人画販売員となり、しばらくの間劇場の合唱団で歌い、荷物運び、筆耕者、パン焼き職人になった。しばしば屋外で夜を過ごし、船着き場の労働者のところにもぐりこみ、飢えて、自尊心を傷つけられ、殴られた。希望がなく、屈辱的な人生だった。その時期でもっともひどかったのは、若きペシコフが25人の仲間と狭く薄暗い地下室に息もできずに座り、パン焼き職人として働いていた時だった。「人間がそうやってその日暮らしをし、周囲が何も変わらないのも、非情に苦痛に満ち、滅入ることである。この状態が彼の魂を抹殺してしまうのでなければ、その環境の永遠の単調さは時間と共に彼にとってますます辛いものになるだろう」。貧困は単に気を滅入らせるだけでなく、貧困はあらゆる悪衝動を増長する。富も人間をダメにする。が、貧しい人は自力でなんとかすることも、自分を隔離して守ることもできない。貧困の環境で生み出される精神的な害悪ほど、ゴーリキーが嘆いたことはなかった。たとえ苦労や物質的欠乏を若きゴーリキーが克服していたとしても、「虚偽や抑圧」が貧困の結果だという理解は、ゴーリキーに耐えがたい状態に終止符を打とうと決心させた。自殺の試みが失敗し、若きゴーリキーは再び生きることに向き合った。彼が言うには、「もはや外からの助けは当てにならず、いかなる幸運な偶然も期待しなかった」、むしろ「私の中で徐々に反抗的な意思が育ち、生活状況が不利になればなるほど、自分がより強く賢く思われた。環境への抵抗がまさに人間を形づくるということをごく若くして理解した」。自分自身の内的力への自省の念、自分が置かれた状況を知ろうとする衝動が、ゴーリキーを不快なことに抵抗し、自分自身を余計だとか必要がないとか考えないようにさせた。あらゆる不運や不正の責任は、犠牲者にあったのではなく、人間が晒されている関係性において何かがおかしいと早い時期からゴーリキーにもわかっていた。

ゴーリキーは不安に襲われながら街道を歩いた。この時代、何万人もの人が村から村へ土地を旅して回り、森

1) [訳注] 翻訳に際しては以下を底本とした。Kurt Kersten, «Maxim Gorki: Der Prophet des Sieges», in *Das Wort: Literarische Monatsschrift*, Heft 3, September 1936, pp. 6-10.

や草原に暮らし、カザンからサマーラやアストラハンへ、アストラハンからティフリスやウラジカフカスへ、黒海の海岸に沿ってベッサラビアまで行き、ウクライナに戻りキエフへ、キエフからドネツ盆地を通して再びヴォルガへと巡礼した。それは数えきれない動揺した失業者の大規模な移動の最初の波というわけではなかった。何百年も前からこの逃げるような巡礼移動は繰り返されていた。乞食やならず者、異端者、遍歴修道士やジプシーといった人たちの間で、若きペシコフは何年かを過ごし、かつてステンカ・ラージンやボロトニコフ²⁾やプガチョーフの仲間たちが、皇帝、地主や大地主貴族、主教や修道院支配に逆らう大勢の反逆者たちを集める前に歩いた小道をなぞった。ヴォルガ川に沿って、軍は行軍した。いつもこの地方はエネルギーの中心であり、ここから革命的なレジスタンスが育まれた。商業資本主義者はこの地域を通して商品をオリエントから大きな交易地であるモスクワに輸送させ、多くの反乱がここで最初に火を点けられた。ゴリキーの成長の過程をはっきりと具体的に説明するには、この事実、このロシア革命の偉大な伝統に注目しなければならない。

街道に、船着き場に、酒場や無料宿泊所に、村の居酒屋に、自分の鎖以外に失うべきものがない反逆者たちがいた。ゴリキーは次のように告白している。「あらゆる種類の荷運び人や裸足の人間、ならず者の中で、私は赤く燃える石炭にはさまれた鉄の塊のように感じていた。毎日毎日が、私にたくさんの鋭く燃えるような印象をもたらした。私の周りには、あらゆるものを奪われ貪欲になっている粗野な本能を持った人間が渦巻いていた。私は生に対するしぶとさが好きだった。あらゆるもの、世界中のいかなるものに対しても嘲笑的で敵意に満ちた彼らの態度が、自分自身に対する無頓着さが気に入った。私の直接体験した事々は、これらの人々全てを動かし、私にこの悲惨な環境に完全に沈潜する気にさせた」。ゴリキーがここで何も失わずに、最高のエネルギー展開で頑張り通し、ニヒリズムやアナキーに陥らずに、しかも引きこもりにも、尊大に孤高を守ったりもしなかったことが決め手となった。重要なのは、ゴリキーの放浪仲間との関係が強調されていることである。なぜなら彼はここでも、支配階級に寝返って、支配階級の利害を守った時、彼ら自身が属していた階級から遊離してしまったドイツの現象とは本質的に異なっていた。

若きペシコフが街道を進み始めた時、ロシア内政の発展は、ある決定的な転換期を迎えていた。放浪生活を送っていたペシコフを自殺へと駆り立てたひどい沈滞が、国全体にのしかかっていた。アレクサンドル2世の暗殺後、恐怖政治を伴う反動が支配していた。ジェリャーボフ³⁾と彼の友人たちの希望は、アレクサンドルの殺害が蜂起への合図になることだったが、裏切られた。反抗するインテリの、ブルジョワや貴族生まれの男女たちの運動は、彼らが「人民の中へ出向いた」のであり、決して民衆と一つにならなかったために挫折した。ジェリャーボフの呼びかけに答えはないまま、ローリス＝メリコフの政治は、シノド〔ロシア聖務院〕の院長ポベドノスツェフの影響で、全ての準備した改革案をあきらめ、「第三部」⁴⁾はニコライ1世のもっとも悪しき時代のように真の政治機構となった。しかしこの時期、ロシアでは大きな産業の発展が、ゆっくりととどめようなく進み、商業資本主義は工業資本主義と覇権を分かちあわなければならなかった。この再編とともに、革命勢力の重点も移動し、都市のプロレタリアート、すなわち労働者階級が革命運動の担い手となった。ペシコフは放浪生活から都市に戻った時、工業プロレタリアートの政治的課題に取り組み、マルクスの著作を読んで議論する労働者サークルに入った。人間がその人生を捧げたいと望む明確な方向性を決め、人格とものの見方が形成される年齢にゴリキーは達していた。彼はひどい失望や辛苦や辱めや侮辱の生活を経験したが、この試練の過程で大きな抵抗力を発揮し、このサークルに苦痛に満ちた様々な経験を知らしめた。彼はわずかな人しか知らないようなロシアを知っており、隠れたロシアを知っていた。そしてそこでは特殊な秘密、隠れた神秘的状況などないことを経験していた。ゴリキーが革命労働運動と接触を持ったのとほぼ同時期に、レーニンの政治的活動が始まった。

若きペシコフがプロレタリア作家ゴリキーを名のり始め、コロレンコを協力者と助言者として、カザンとサマーラ、ニジニ・ノヴゴロドと後にはペテルスブルクで、次第にジャーナリストとして形成された。農民や手工業者の運命を感傷的に物語るこの人物〔コロレンコ〕は、政治的に行動的な人間ではなく、決して参加することはなかったが、代わりに十分な配慮をもって若い革命運動の経過を見守った。作家コロレンコの繊細な性

2) [訳注] イワン・イサイエーヴィチ・ボロトニコフ (?-1608)、1606-7年農民反乱の指導者。

3) [訳注] アンドレイ・イワーノヴィチ・ジェリャーボフ (1851-1881)、ロシアの革命家。ナロードニキ (人民派) の活動家。1881年3月1日の暗殺計画の前夜、2月27日に逮捕され、4月3日処刑。レーニンがロベスピエール、ガリバルディに並ぶ、偉大な革命家の1人にあげている。

4) [訳注] 皇帝直属の秘密警察。1880年に内務大臣ローリス＝メリコフによって内務省に権限が委譲され、廃止されている。

質は、抵抗においてよりも忍耐においての方が強かったが、しかし彼は、既に何度も収監され、多くの町で警察の記録が提出されていた被後見人〔ゴーリキー〕の激しい気性を庇護した。コロレンコからゴーリキーが学んだのは、いかに自然と人間を描くかであり、コロレンコから逆に西側ではあまり知られていないロシア文学の民族的な語り手へと至る道に導かれた。ゴーリキーはごく少数のロシア作家と同様、ロシアの民衆の本質と密接に結びつき、彼の芸術作品は伝承や寓話の時代にまでその根を延ばした。年とったゴーリキーは、理由なく極めて初期の民俗学的な表現へ注意喚起したわけではなかった。ゴーリキーの著作において、頑固な反対派アヴァクームが繰り返し言及されているのに注意を向けなければならない。アヴァクームはゾフィー君主の時代からの粘り強い宗派指導者であり、その独裁的支配に対する抵抗は火刑で終わった。ゴーリキーはロシアの文学史が、文学や作家に敵対する皇帝支配との闘いの歴史であった事実を引き合いに出し、18世紀に大胆な表現で鞭打ちに処せられたヴァシリー・トレジャコフスキーの運命や、プーシキンが絶望した叫び「悪魔が理性と才能を持った私を、まさにロシアに生まれさせたのだ」を思い出させた。プーシキンは自堕落な仲間によって厄介事に追い込まれ、そのせいで命を落とした。ゴーゴリは断念した。ドストエフスキーはカートルガ〔徒囚〕の鎖を身につけたが、そのことは「ニヒリストで皮肉屋」の友人に嘲笑のように作用し、この民衆の自由への闘争を悪意をもって拒絶する『悪霊たち』の作家〔ドストエフスキー〕の葬列において、この鎖が反抗的な学生たちによって身につけられた。労働者階級の革命的闘争から離れた立場でレフ・トルストイは非暴力性の福音を説いたが、一方ゴーリキーは既に早くから、人は暴力によって民衆の権利を勝ち取らなければならないと明言していた。ゴーリキーは偉大なトルストイに圧倒され、大地は彼を支えることはできないだろうといわれている英雄スヴァトゴール〔ロシア口承叙事詩の巨人“聖なる山”の意〕に比した。しかしゴーリキーは次のようにも書いた。「彼にとってあらゆる肯定の否定の形が存在し、とても深遠でとても悪意のある無限を基盤にして成長するニヒリズムが、たぶんこの男を前にしては誰もこれほどの恐ろしい明晰さで感じたことはない、限界がなく希望のない絶望と孤独があるように思える」。ゴーリキーはある対話で「私はとりわけこの種の、あらゆる方法で生の悪に暴力も辞さずに！ 抵抗する心構えのある人間を愛する」と言っ

たのに対し、トルストイは急に激しい口調で「暴力は大きな悪だ！」と叫んだ。ゴーリキーの『どん底』のルカは、なによりも西側でいつもゴーリキーの人生観の解釈者とされたが、しかしゴーリキーはルカにおいて、誰も何もそれ自体としては現わそうとしないあらゆる学者先生のエゴイズムを暴露しようとした。ルカではなくゴーリキーが、「海燕」で、革命の接近を告知したのだ。

ゴーリキーはひとつの、今まで誰もその完全な悲惨さを描写したことがないロシアのベールを引き裂いた。その深みや広がりから悩む人たち、搾取され、殴られ、虐待された人々がやって来て、彼らの仲間、ゴーリキー、共に腹をすかせ、苦しみ、彼らと共に迫害され追放されたゴーリキーによって、彼らが何に苦しんでいるのか告知させた。彼は1905年1月の街頭に彼らと共にいて、後に彼らの蜂起を、彼らの誇らしい英雄的闘争を描写した。ペトロ・パウロ祭でこの『母』や『どん底』の作家を閉じ込めた時、全世界で抵抗の嵐が生じたのだ。長い間ゴーリキーが亡命したのは、新しい戦いに戻り、そして闘争の中でロマン・ロランやバルビュスやカール・リープクネヒトのように権力者や支配者、自分の国の圧政者に対して声をあげるためであった。この人間は、人生において革命的作家に負わされた多くのことを耐え忍んでおり、いつも民衆が戦っている場に身を置いた。階級による抑圧の非情さと残酷さを感じていたこの男は、繊細で感じやすい魂を持ち、彼の紋章には偉大な作家の涙が輝いていた。彼には何事も楽ではなかった、彼の気質は様々な試練に対し努力を惜しまぬ覚悟をしていた。しかし彼は感動的な「魂の広がり」を持ち、人間が悩み、時代の偶像に屈服せず、権利のための闘いに一步を踏み出す時、兄弟のように人間を抱きしめるのだ。ファシズムのドイツは、今も彼の名前が付いている〔ソ連時代はゴーリキーが市名〕古いヴォルガ川の町、ニジニ・ノヴゴロド出身の貧しい大工の息子の著作を禁止し、焚書にした。偉大な作家の死に際し起きたのは、——古い時代の伝説のように聞こえるのだが——スターリンが死んだ男の寝床を訪れ、革命の告知者に別れを告げるために1時間ほど滞在したのである。彼は海燕の歌を作った。「その叫びからは嵐への憧れが聞き取れる」。怒りの力、情熱の炎、勝利の確実さを雲はこの叫びから聞く……そして彼は、勝利の予言者は叫ぶ：「ただ暴れ回れ、嵐の風、暴れ回れ、もっと強く、もっと荒々しく！」……

（訳：柴田隆子）